

倭人伝に記された「邪馬台国」への「真」の道

2020/7/20 (3版)

塚田和正

まえがき

筆者は九州や近畿地方に縁もゆかりも持たない。従って「邪馬台国」などどこにあってもよいと考えており先入観など全くない。しかもその地に行ったこともなく観たこともなくどんな地理であるかも知らない。またその地の古代史などにも専門知識を持たない。

筆者は一切の予断を持つことなく、魏志倭人伝の解説に挑んだ。

筆者は魏志倭人伝に記された「邪馬台国」への路程について、書かれた順序の通りに、一字一句書かれたままに素直に読み取り、白地図に落とし込んだ結果、時計回りで九州を一周して「邪馬台国」に到達する路程であるとの結論に達した。

九州一周は連合国（倭国）が大国であることを誇示するために、「卑弥呼」の意向で行なわれた追加の路程と理解される。

本結論に至った筆者の基本的な考え方を以下に述べる。

1. 読み替えなし解説のための基本条件

倭人伝の路程について、多くの論者で異なるのは「南至投馬国水行二十日」、「南至邪馬台国水行十日陸行一月」の解釈である。

筆者は以下の定義で解説することで、倭人伝の全路程を順次式で合理的に読み解くことができた。

定義1. 「水行」とは海岸線に沿って小舟で航行し、夜は陸に上がって泊まる旅のこと。

定義2. 「南至」は出発地を海岸線に沿って南方向に出航することである。従って出発地の海岸線は南北に走っていなければならない。出発後は海岸線に沿って進み、方角は海岸線の形によって変わるため、到着地は出発地より南にあるとは限らない。

・定義1、2、の解釈に従って「水行」の路程を進めると

出発地は南北に走る海岸であることから、最初の水行は北部九州で海岸線が南北に走るところとなる。玄界灘は条件に合わなく、適合するのは周防灘となる。

従って水行の出発地「不彌国」は周防灘に面した国となる。「不彌国」から路程の距離、方角を逆にたどると「末蘆国」に着くことになる。「末蘆国」は玄界灘に面している必要があるため、当てはまるのは宗像付近となる。壱岐から宗像の距離は倭人伝に記された千余里に相当することからも「末蘆国」は宗像付近と比定することができる。

周防灘を南に出航し海岸線に沿って九州の東海岸を航行して「投馬国」に到着する。

「不彌国」から水行で二十日間かかることから、「投馬国」は南九州にあると推定する。次に「投馬国」から南に出航し十日水行するので、「投馬国」の海岸線は南北に走っていることになる。南九州で南北に走る海岸線として鹿児島湾が適合する。よって「投馬国」は鹿児島湾奥にあったと判断する。

「投馬国」から「邪馬台国」へは、鹿児島湾を南に出航し、九州の西海岸に沿って航行し島原湾から有明海に入り、さらに筑後川を遡って「邪馬台国」に到着する航路があったと考える。

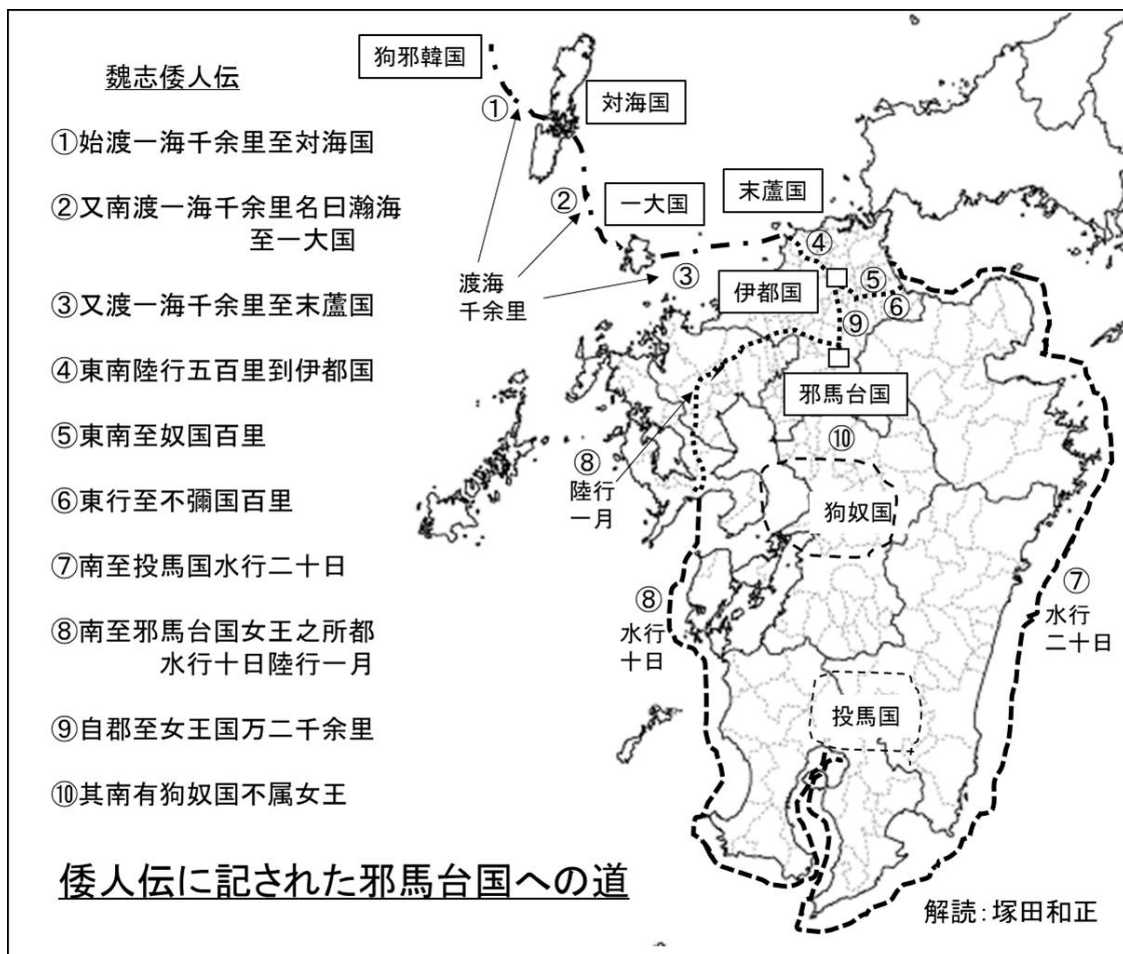
しかし「邪馬台国」とその南の「狗奴国」が敵対しており、「狗奴国」が島原湾を支配しているため通れなかったため、長崎半島に上陸し陸行一月で「邪馬台国」に到着したと推定する。

倭人伝の解説から各国の相対的位置も比定できる。

「末蘆国」は宗像。宗像から東南五百里が「伊都国」。「伊都国」と周防灘の間に「奴国」、「不彌国」。筑後川上流に「邪馬台国」。「邪馬台国」の以北に「伊都国」。「邪馬台国」の南に「狗奴国」。鹿児島湾奥に「投馬国」。

2. 図 解説した倭人伝に記された「邪馬台国」への「真」の道

解説した時計回りで九州を一周する一筆書き状の「邪馬台国」への道を表した。



3. 魏史の編纂者は邪馬台国までの路程の正確性を要求した

倭人伝については、辺境の地である倭国についてその存在を書くことにあった。最も重要

な記載情報は倭国の首都「邪馬台国」までの正確な路程にあったと考える。魏は朝貢して冊封とした倭国を守る責任が生じ、援軍の要請があれば対処する必要があり、その計画立案などには正確な路程情報を必要とした。援軍の派遣まではいかなかったが、「卑弥呼」が「狗奴国」から攻められているので助けてほしいと郡の役所に願い出ている。

倭国に派遣された魏の使節団は現地調査のみならず、郡や「伊都国」に派遣されていた役人からも情報を得て、路程の精度を高めたと考える。地名や人名など日本語の固有名詞は、聞き取った発音を漢字化したため誤りや書き写しは有り得るが、記された距離、方角が誤っているなどは有り得ないと考える。路程の書き写しにおいても、距離、方角などは細心の注意が払われ、移し間違いが生ずることは考えられない。文章の読み方についても、途中から放射式に読むなど謎解きのような構成にすることはあり得ない。結論として、記された路程については、書かれた順序で、距離、方角もそのまま読み進めれば、行き着いた先が「邪馬台国」となるはずである。

4. 「卑弥呼」は連合国（倭国）を、どの様にして書いて欲しかったか

・「卑弥呼」の連合国（倭国）は大国であることを示すため、各小国の人口を水増しして説明したことが考えられる。

「奴国」に二万余戸、「投馬国」に五万余戸、「邪馬台国」に七万余戸があったと記されている。一戸に5人住んでいたとすると、これらの国の規模は現在のの中核都市に相当する。

当時の食糧事情から考えると、自給自足のため広大な耕作地が必要となり、それに適応できる土地があったか疑問である。

「伊都国」は近隣の小国を統率する役所（一大卒）があり、それに伴う警察のような役所もあったであろう。また出入国を管理する役所、貿易を管理する役所などがあり、大使館の役目の郡使が滞在する国でもある。しかし「伊都国」は千余戸と倭人伝に記されている。重要な国にしては人口が少なすぎると考えられる。これは「伊都国」が使節の往来が多く、既に魏にも知れており、人口を水増しすることができなかったからではないか。

このことから「邪馬台国」などの万を超える戸数は水増しされており、実態は「伊都国」と比べて、多くても数倍程度と考えられないだろうか。

・「卑弥呼」は連合国全土を使節に巡ってもらうため、水行二十日以降の行程を付け足し、倭国の範囲は九州一帯であることを誇示するとともに、「卑弥呼」の母国である「投馬国」に立ち寄らせ、記録に残すよう要望したと考える。

これらの旅は、「邪馬台国」への実の路程とは別となることから、下級役人に行かせ、路程の情報となる距離、方角に関する調査を省き、旅の長さから全土の広さを印象付ける日数を記すこととしたと考える。この行程の記載方法が、後世解読を難しくしたのではないか。

・「卑弥呼」は倭国以外の国々の正確な情報を使節団に伝えることを避けた。

周辺にある他の倭人の国々は「卑弥呼」の連合国に比べて文明が劣っている小国であることを説明した。

また同時代にあった畿内の文明大国については使節には伏せられたため、倭人伝には記されなかった。

5. 倭国と邪馬台国との関係について

・倭国という国名は倭人が集まって作った国として漢の時代から中国で使われてきた。

魏志倭人伝に表れる倭国とは、「邪馬台国」を含む小国が集まった小国連合に対して、中国が付けた国名である。この連合国の王が「卑弥呼」であり、その首都を「邪馬台国」に置いていたことになる。

これを現在の日本に置き換えると、倭国が日本であり、王が総理大臣で「卑弥呼」は総理大臣相当の官職名、その首都の「邪馬台国」が東京となる。「卑弥呼」の宮殿があった場所は、東京に当てはめると、官庁がある霞が関が相当する。

また「邪馬台国」には「邪馬台国」を治める長官がいたが、この長官とは現在の都知事が相当と考える。従って「邪馬台国」を治めるのは長官であって、倭国の王「卑弥呼」でないということになる。これを現在に置き換えると、東京を治めるのは都知事であり、総理大臣ではないということである。

・魏志倭人伝では、連合国内の小国にはそこを治める長官がいた。これを現在に当てはめると小国は県が相当し、長官は県知事が当てはまる。連合国に属さなかった「狗奴国」では、長官ではなく王が治めていた。連合国に属した小国では、元の王は連合国の王の下で長官に位置づけられたと考える。

・「卑弥呼」と「投馬国」には特別な関係にあった。

「投馬国」には王ではなく長官がいたことから連合国に属していた国であることがわかる。「不彌国」から「邪馬台国」に至るまでの二か月の旅では、多くの小国に立ち寄っているはずであるが、倭人伝に記されている国は「投馬国」のみである。

なぜ「投馬国」のみが倭人伝に記されたか。

「卑弥呼」は各小国から推されて連合国の王になった。従ってその前は他の小国の王であったことが考えられる。しかし「卑弥呼」が連合国の王になる前は、どこで何をしていたか倭人伝に記載はない。

「卑弥呼」が連合国の王になる前は「投馬国」の王であったとすれば、この特別扱いは納得できる。「投馬国」は首都「邪馬台国」に次ぐ大国であり、この国の王が他の小国に推されて連合国の王になったとしても不自然さはない。「投馬国」の王「卑弥呼」が連合国の王となり、首都「邪馬台国」で連合国を納めたと考える。従って「投馬国」は「卑弥呼」の母国に当たる。「卑弥呼」には多くの従者や護衛兵などが「投馬国」より付き従ったことが考えられる。このため「邪馬台国」と「投馬国」との間には頻繁に往来、交流があり、この間を結ぶ九州の西海岸回りの航路ができていたと推察する。

・大和政権では、倭人伝の「邪馬台国」を自政権と結び付けようとして、倭国と「邪馬台国」は同義語であるとして、国名の倭と「邪馬台」は同じであるとした。

これを政策として利用、倭国の「倭」を「やまと」と読ませ、「大倭」を「やまと」と読ませ、「大和」を「やまと」と読ませ、「日本」をも「やまと」と読ませることとなったと考える。

このことから、「邪馬台国」の「邪馬台」は「やまと」と発音していた証拠ともなると考えられる。

6. 邪馬台国畿内説について

倭人伝に記載されている倭国は小国の連合国である。連合国の首都が「邪馬台国」である。倭人伝に記載されている国々のほとんどが九州にあり、路程に記される「不彌国」までは九州にあったとすることは、畿内説、九州説両論者とも共通の認識である。

「邪馬台国」が畿内にあるとすれば、九州と畿内に挟まれる中国地方にも多くの連合国に入る小国があつて当然である。しかし記された中間の国は「投馬国」のみである。連合国に含まれる大部分の小国が九州のみにあつて、その首都だけが離れた畿内にあるのは不自然である。倭人伝の記述内容から「邪馬台国」が畿内にあると読み取るには無理がある。このため畿内説論者は、倭人伝の記載内容には間違いが多く信用できないとして、同時代の遺跡などにより「邪馬台国」の地を証明しようとしている。

7. 邪馬台国九州説について

九州説の論者は、倭人伝に記載されている国名の発音と現在に伝わる地名の発音の類似性、地域に伝わる伝承と古事記などの故事との関連付けによって「邪馬台国」をはじめとするその他の国々を九州内に比定しようとしている。松浦半島が「末蘆国」は発音類似の代表例である。発音を漢字化した国名については、当時の発音を明確に再現することは困難であり、現在の地名との比定は確実性に欠ける。また地名は支配者とともに移ることもあり、現在地を発音の類似性から比定することの信憑性には疑問が残る。倭人伝に記載された距離、方角を無視したこの比定方法では絶対的信頼性に欠ける。

8. 放射式の読み方について

倭人伝の文章は、出だしは順次式に読み、途中から放射式に読むように文章が構成されているので、これに従って読むことで「邪馬台国」に正しく到着できるとしている。

この場合は「伊都国」から先が放射式で読むこととなる。放射式で読むと文章の構成上「奴国」、「不彌国」、「投馬国」「邪馬台国」それぞれが行程の終着地になる。「邪馬台国」が終着地になることは理解できる。しかし「邪馬台国」以外の国々は「邪馬台国」と無関係な国となるにもかかわらず倭人伝に記載されていることになる。放射式の発案者は「邪馬台国」以外の国々の扱いについて全く考慮していなかったと考えられる。これらの国々の記載理由が説明できない限り放射式の読み方は間違いであると言える。

9. 完全解読の鍵は「末蘆国」の場所にある

多くの論者は、倭人伝に記された距離千余里を満たしていない松浦半島を「末蘆国」に比定している。ここを「末蘆国」として「邪馬台国」を探すと、倭人伝の解読上に多くの矛盾が生まれる。これまでは矛盾点を、倭人伝の字句の誤りとして、論者の都合により読み替えられ、多くの邪馬台国の地が示されてきた。

「狗邪韓国」から「末蘆国」までの海を渡る海路について、倭人伝では

- (1) 始渡一海千余里至対海国・・・・・・(狗邪韓国→対馬)
- (2) 又南渡一海千余里至一大国・・・・・・(対馬→壱岐)
- (3) 又渡一海千余里至末蘆国・・・・・・(壱岐→「末蘆国」)

と記している。

筆者はこの文章から千余里に合った「末蘆国」のあるべき場所を探した。

(1)、(3)の文章には方角が示されていないが、(2)の文章にのみ方角が「南」と示されていることに着目した。

これは(1)、(3)について海路は一つのみで方角を示す必要がなかったと考えられる。(2)では文章にある「南」の方角とは別の方角の海路が存在していたことを示唆していると考えられる。この別の海路とは対馬から「東」の方角にある沖ノ島を経由する海路であったと推測する。このことから倭国への玄関口「末蘆国」に至る海路は(3)の壱岐経由及び倭人伝には記されていない沖ノ島経由の二つの海路があったと考える。

二つの海路に共通する終点の港が、壱岐及び沖ノ島の両方から千余里の距離に当たる宗像付近に置かれたと考える。この終点の港の国が「末蘆国」に相当する。

以上の海路を記した倭人伝の文章の解釈からも宗像が「末蘆国」と推察できる。

あとがき

筆者は魏志倭人伝に記された「邪馬台国」への路程を、一字一句読み替えることなく読み解いた結果、時計回りで九州を一周するルートであることを発見した。

筆者が地図上に描いた九州を一周する一筆書き状の線は、魏志倭人伝の文章上からのみ読み解いたものであり、他の歴史資料などからの引用や参照は一切必要としなかった。

結果として、魏志倭人伝に記された路程に関する記述内容には全く誤りがなく、読み替える必要がないことが証明された。

本論成立の絶対条件は「末蘆国」の場所は宗像であること。筆者は地理的条件及び倭人伝の文章から「末蘆国」に相当する適地は宗像であることを示した。

今後本論で描いた線上で、歴史学的な見地から倭人伝に記された国々の地が比定され、水行のルートや港、陸行のルートなどの詳細が定まることで魏志倭人伝に記された「邪馬台国」への「真」道は完成する。

筆者には歴史学的な見識はないので「真」の道の完成は理解ある見識者に委ねます。